古事類苑

遊戯部八

茶湯二

點茶作法

〔茶道早合點下〕茶の湯の大概

茶をたつる所作を、手まへと云、

〔退閑雜記後編二〕總て萬づの事、法則のなきはあらず、○中略茶たつるいやしき事にも、茶七のとりやう、茶のてんずる作法のこりなく侍りたり、これには法ある事をしりて、まれ人のまへにて、その法しらで茶てんずる事をば恥るぞかし、

〔老の波〕茶は一時の心やりなりといへば、いかに茶たて侍りても、心のまに〳〵なるべしなどいはんが、左にもあらざるなり、其ゆゑは宗易らを始めとして、茶に名あるもの、其ほど〳〵のふしをそへ、文をくはへて、おのづからの法をつくり出したるなり、されば臺子より薄茶手前に至るまで、強て求めいだしたる所作はなく、皆ちりあれば拭ひ、けがるれば洗ふにて、客を敬ひ親しみをあつくして、たゞ其ほどに心を用ゐるなりけり、遠州流にても、石州千家のたぐひにても、いづれも其とり所はある事にて、何れの流派よきのあしきのといふ論はあらざるなり、たゞわが覺えしところにてなすべきなり、

〔茶道獨言〕薄茶手前をはじめ、諸具の取扱に及んで、肩をいからしひぢをはり、無言の行をなすごとく、顏をいからしてなすこと、いらぬこと也、只主客和順にして驚くことなく、靜にしてねばる